

医療法人済恵会 広報誌

## オアシス72号

広報誌オアシス 制作 広報委員会  
〒379-0116 群馬県安中市安中3532-5  
Tel (027) 382-3131 FAX (027) 382-6568

## 増床認可と当院の地域包括ケア

皆さんこんにちは須藤病院の柳澤肇です。毎日の診療ではお世話になっております。当院では先日の高崎・安中医療圏における会議で、新規に8床の増床が認められました。同時にさわやかクリニックの17床を、本院に移動させる許可も得ました。須藤病院としては25床の増床となります。

病院や介護施設の病床数に関しては、政府の施策として、2025年までに病院の入院患者・介護施設入所数を再編成する（減らす）という社会保障改革を示しております。今回の当院の増床に関して

は、病床数を減らすという政府の方針と相反する結果となりますが、これは高崎総合医療センターや富岡総合病院らの中核病院から安中地域の患者さんの受け入れをスムーズに行い、さらに安中地域の家庭でケアができない患者さんの受け入れを、まず安中地域で行えるようにする。以上の必要性が判断されたことで増床が許可となりました。このことは、当院の地域医療に対する貢献度が高いという評価の表れだと思います。

また、最近地域包括ケアという言葉をお聞きになったことはありませんか？これも先に書きました政府の病床数の再編成という政策に関わっています。つまり、高齢化がピークとなる2025年を見据えて、中重度者も含めた医療・介護・住まい・生活支援サービスを一体的に提供するシステムを、日常生活圏域に作ることを意味しています。要介護者が重度化しても、病院や施設に入所しないで在宅で生活し

続ける環境を整えることです。しかし、このことは医療介護の必要性の高い高齢者が、地域にあふれてしまうことに他ならないのです。高齢者を在宅で見られる家庭がどのくらいあるのでしょうか？在宅で介護するためには、当然介護者が必要になります。場合によっては子供や家族の誰かが仕事を辞めて介護しなければならないこともあるでしょう。そのようにならないためにも地域がまとまり包括的にケアが行えるように環境を整えていく必要があります。

ところで須藤病院では、患者さんの病状により、一般病棟・療養型病棟・回復期型病棟に入院し、退院後は介護老人保健施設めぐみ、有料老人ホームななかまど、ジョリエやなせ、デイケアセンターさくらを利用して、在宅に帰れるようにリハビリ治療し、往診も行いながら、在宅医療も充実していくシステムをすでに持ち運営しています。地域包括ケアをすでに実践しているといってもいい状況です。医療と介護を合わせて、救急医療から在宅介護まで隙間なく地域に貢献しています。

私どもは、ご利用される患者さまに満足いただけるサービスを今後とも提供できるように、従業員一同がんばってまいりますので、ご声援のほどよろしく申し上げます。

副院長  
柳澤 肇

# 皆様から寄せられたご意見に寄せて

皆さんこんにちは、季節の移ろいは早いもので、朝晩はだいぶ涼しくなってきました。

今回は患者さん、ご家族の方からいただいたご意見についてお話したいと思います。

私の感じた事としては、今年の4月から看護部への苦情を受けることが多かったと思います。これは大変お恥ずかしい事では有りますが、真摯に受け止めてしっかりと対応していかなければいけないと考えております。

ここで皆さんからのご意見の一部を紹介させていただきます。「最近傷が多いがどういうことか?」「タオルが破れていたが、何の連絡もなく洗濯してわかった」「話し方や態度が命令的だ」「入院して3日は1日3回血圧を測ったが、その後1回だけになったのは手抜きだ」「抗生剤の点滴がなくなって飲み薬変わっても説明がない」「2週間も隔離されているが入院している意味があるのか」などです。不快な思いをされた患者さまには本当に申し訳ございませんでした。

私がこのような事象全てに共通して考えられる問題点は、“看護師の誠意・コミュニケーションの不足”だと思います。看護の現場では様々な疾患のため患者さまの身体が硬くなっていて、その患者様の身体の向きを変える時やオムツ交換の時に、更に身体に力が入ってしまい手足が重なってしまう方もいらっしゃいます。その事実を丁寧に家族の方にお話をする事、手足が重なっても傷にならぬように工夫することが必要だったと思います。また自分で動くことの出来ない方には、身体の下に

タオルを敷いて、そのタオルを使用してベッドからの車いすなどに移ります。患者さんを支える際にタオルが破れることも実際にあるのですが、連絡をしなかった事がこれらの過ちだと思います。言葉遣いや態度は日頃から気を付けなくてはなりません。そして日常の看護業務上の決まりを自分たちは知っていても、患者さまが決まりを知る由もない事を、私達は念頭に置いて行動をしなければなりません。

今回頂いたご意見は看護師が患者さんと本当の会話をしていない結果だと思ひ、深く反省しております。今現在、看護部では皆さんからのご意見を無駄にしないために、看護師一人一人にその内容を伝えているところです。そして日々の自分の言動・行動を振り返り、ふたたび皆さんから信頼される看護師になることを目指します。

須藤病院の行動規範である“私たちの約束”の1番目には“私たちは笑顔で親切な対応を約束します”とあります。ここで言う“親切”とは相手の身になって、その人のために何かをすること。思いやりを持って人のために尽くすことと辞書にあります。この約束が守れるよう私も指導していきますので、今後もたくさんのご意見をよろしく願ひいたします。

**看護部長  
佐藤 明美**



# アレルギー呼吸器科 新設



## 黒沢 元博 医師

～ 略歴 ～

出身：生まれも育ちも東京都文京区本郷です。  
高校で修学旅行に参加するまで、箱根の山を越えたことはありませんでした。また大学入学まで、北関東三県に行ったこともありませんでした。

出身大学：群馬大学医学部 昭和49年卒  
群馬大学・弘前大学・秋田大学の医学部で教育と研究、そして大学附属病院で患者さんの診療に勤めてきました。平成13年秋からは、群馬県の地域医療に携わっています。  
医学博士（群馬大学）・薬学博士（岐阜薬科大学）

黒沢先生に6つの質問 ①医師になった理由 ②医師になってよかったこと  
③尊敬する人々 ④大切な言葉 ⑤趣味 ⑥須藤病院について一言

- ① 物心がついた幼少期より、医師を志しました。もともと母が病弱であったこと、住み込みの職人さん達も働いていた商店の長男であったこと、そして単純に、人の役に立ちたいと思い医師を志しました。
- ② 患者さん達に感謝して頂けること
- ③ これまで、医学・薬学の分野で、医師としての道を教授下さった先生方
- ④ 泥水に注ぐ一滴の清水の如く
- ⑤ 硬式テニス、クラシック音楽鑑賞
- ⑥ 病に悩む人々、健康維持に不安を抱く人々の“オアシス”である当院の職員として恥じないように、診療に務めます。